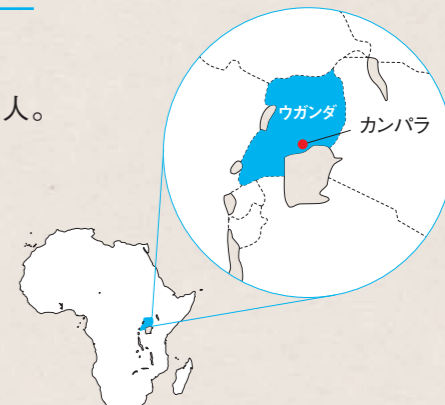




International Cooperation Reporter

特別コーナー



NAME 国際協力レポーター IN UGANDA

TITLE 私が見た国際協力の現場

その豊かな自然の美しさから“アフリカの真珠”と称されるウガンダ。今年8月、この国に降り立ったのは、JICAの国際協力レポーターの10人。彼らが目にしたのは、広大な大地で力強く生きる現地の人々と、それを支える日本人の姿だった。



「あしながウガンダ」では日本の歌を披露するなどの交流を行った

真つ青な空の下で力強く生きる人々

「こ んには！日本から来た、国際協力レポーターです！」
小さな教室に並べられた小さな机といす。そこに座る小さな子どもたち。「これから何が始まるんだろう？」と言わんばかりに、興味津々に前を見つめている。その視線の先に立っているのは、日本の若者たち。今年8月、国際協力レポーターとしてアフリカ東部のウガンダを訪れた10人だ。

「日本の国際協力の現場を見てみたい」と、今回の視察の旅に参加した10人。そのほとんどが初めてのアフリカ。飛行機からアフリカ最大の湖、ビクトリア湖が見えた瞬間、わあっ！と歓声が上がった。
最初の訪問先は、日本の「あしなが育英会」が2001年に設立し、エイズ孤児の教育支援やこころのケアを行っているNGO「あしながウガンダ」が運営する学校。教室や図書館は日本の協力で整備されている。「子どもたちは、ちゃんと宿題をやってきますか？」。現地の先生たちに積極的に質問を投げかけているのは、今村沙織さん。東京都内の中高一貫校で英語を教えている彼女は、「授業で生徒たちに世界のことを伝えられたら」という思いで参加。「ウガンダの子どもたちはみんな学ぶことに熱心ですね」と感心していた。
未来を担う子どもたちを支える施設を後にした一行は、国の産業を支える若者を育成する「ナカワ職業訓練校」へ。ここでは長年にわたり、日本人専門家による技術指導が行われてきた。中に入ると、作業服に身を包んだ人々が、汗を流しながら、自動車整備や溶接、木工などの実技を学んでいた。
「かつて日本で研修を受けた人たちが、指導者として活躍しているのは素晴らしい」と永原実さん。JICAの支援を受けた人々が次世代に伝え



学校の子どもたちと交流する内尾さん。親をHIV／エイズで失っても、その笑顔はまぶしいほどきらきらしていた

る。そこには、ウガンダ人によるウガンダ人のための施設が誕生していた。
今まで知らなかった！
途上国で汗を流す日本人

続いて訪れたのは、首都の国立作物資源研究所。JICAと共に、ネリカ米の研究開発と普及に取り組んでいる施設だ。「約20年前、誕生したばかりの3粒のネリカ米を見て、これだ！と感じたのです」と話すのは、ミスターネリカこと坪井達史JICA専門家。「ネリカ米と私は同い年ということを知って運命を感じました」と九州大学1年の内尾晶子さん。アフリカの農業振興に力を注ぎ、現地の人々にも慕われている坪井さんの姿を見て感動していた。
そしてウガンダでは、保健医療分野への協力も光った。1000人中115人が5歳の誕生日を迎えることなく命を落としてしまうという現実。救われるべき命を救うべく、JICAはさまざまな取り組みを実施しているのだ。その一つ、彼らが向かった先は、ケニアとの

国境近くにあるトロロ病院。院内に一歩足を踏み入ると、聴診器や薬、カルテなどがきれいに並べられていた。「私たちは青年海外協力隊員から5S**を学びました。その取り組みは今も続いています」という看護師の言葉を聞き、「日本の支援により根付いた活動が、現地の人々の手で引き継がれているのが素晴らしい」とみんな感動していた。一方で、ま



日本人専門家とともにネリカ米の研究を行う国立作物資源研究所。アフリカでコメ増産が促進されるよう品種改良に取り組む

だ衛生管理が行き届いていないと感じる部分も。何かを変えるには、地道な努力が必要なのだと感じた瞬間だった。
また、空港近くにあるエンテベ病院では、JICAとBOPEビジネス**を展開している日本企業、サラヤ株式会社の活動を視察。青年海外協力隊と連携しながら、社の主力製品である「アルコール手指消毒剤」を試験的に導入しているのだ。安全な水を得ることが難しいウガンダに、最適な商品。病院で普及を進めることで、院内感染の防止にもつながる。「将来的には原料の調達から生産まで、すべて現地で行ってほしい」とサラヤの宮本和昌さんが説明してくれた。「ビジネスと結び付けば、現地に与えるインパクトは大きいですね」と今村さん。1週間かけて見たウガンダの国際協力の現場は、驚きと感動の連続だった。
国際協力レポーターの活動はここから本番だ。帰国してから3カ月。レポーターという名の通り、彼らは現場で見てきたことをさまざまな形で発信している。



地方の農村マナファで活動する青年海外協力隊員を視察。村の人々に生活の様子などについて聞いた



日本で研修を受けたウガンダの政府関係者たちと懇親会。今村さんは茶道のお手前を披露した

**1 整理・整頓・清掃・清潔・しつけの略。
**2 年間3,000ドル以下で暮らす貧困層 (Base of the Pyramid) を対象にしたビジネス。

COLUMN
国際協力レポーターってなに？

「政府開発援助 (ODA) って、現地でどんな活動をしているの?」。そんな疑問に答えるべく、JICAが毎年夏に提供しているプログラムが「国際協力レポーター」。日本の一般市民が「レポーター」となり、約1週間の日程で開発途上国における日本の国際協力の現場を視察。帰国後に、見たこと、感じたことを、国内のイベントやホームページなどを通じて発信してもらうことが期待されている。2012年はスリランカとウガンダを計19人が訪問。毎年5～6月に、JICA地球ひろばのホームページ (www.jica.go.jp/hiroba/menu/reporter) で公募。



日本が長年支援してきた「ナカワ職業訓練校」では、日本の技術力をあらためて実感した

特別コーナー
International Cooperation Reporter